

小説『遠くの夢、近くの現実』(進路と家族をめぐる選択)

第0章 登場人物紹介

進路を選ぶとは、自分の未来を選ぶこと——だが、時にその未来は、自分一人のものではない。家族の想い、突然の出来事、そして揺れ動く心。これは、そんな現実と直面した一人の学生が、「決断ではなく、対話」を通じて前に進む物語である。

- ・ 宮坂 彩葉(みやさか あやは)

22 歳、大学 4 年生。宮城県・仙台出身。高校時代の弁論部活動をきっかけに新聞記者を志す。マスコミに強い大学に進学し、念願の新聞社から内定を得るが、母親の病を機に「夢」と「家族」の間で揺れ動く。

- ・ 西園 智久(にしぞの ともひさ)

62 歳、大学キャリア支援課のキャリアコンサルタント。落ち着いた物腰と柔らかな語り口で相談者に安心感を与える。彩葉の迷いに寄り添い、「両立」という新たな視点を示す。

第1章 内定の春に降る報せ

五月の風が、大学のキャンパスに柔らかく吹き抜けていた。新緑の葉が揺れ、どこか浮き立つような空気の中に、宮坂彩葉は一人、大学の図書館の窓際に座っていた。

スマートフォンの画面を見つめたまま、彼女はしばらく動かなかった。画面に残る通話履歴。そこには父からの着信が何度も並んでいた。つい先ほど、ようやく重い気持ちでその電話に出たのだ。

「お母さんが……入院して、手術を受けることになったんだ」

そう、父の声は沈んでいた。宮城の実家を離れ、東京で暮らす彩葉にとって、その言葉は現実味を持たず、ただ遠くから響いてくるようだった。春の終わりを感じさせる青空の下、地面がずっと遠ざかっていくような感覚。

彼女は今年、希望していた新聞社から内定をもらったばかりだった。高校時代、弁論部に所属していた彼女は、時事問題を扱う中で、新聞記者という職業に強く惹かれた。社会の現場に立ち、人々の声を聞き、それを伝える仕事。それは、彼女にとって憧れであり、目標であり、進むべき道だった。

だからこそ、大学もマスコミに強いとされるこの東京の大学を選び、入学してからは先輩の助言や業界研究を重ねて準備をしてきた。努力が実を結び、第一志望の新聞社から内定通知が届いたときは、涙が出るほど嬉しかった。父も母も、電話越しに喜びの声を上げてくれた。

けれど、今、その母が病に倒れた。

「帰ってこられる距離にいてくれないか」

父の言葉が、胸の中で何度も反響していた。東京から仙台までは新幹線で一時間半。近いようで遠い距離。急に帰ってきてと言われてすぐに駆けつけられるほど、身軽な生活ではない。学生生活の最後を友人と過ごそうと思っていたこの春は、まったく違う意味合いを帯びはじめていた。

彩葉は、目を閉じて深呼吸をした。

夢を諦めるのか、家族を選ぶのか——そんな単純な二択ではないことは、彼女も分かっていた。だが、内定先の新聞社は全国転勤が前提で、勤務地はまだ分からない。今、記者として社会に出る道を進めば、しばらく家族のそばにはいられないかもしれない。

母は、どんな気持ちでいるのだろう。

涙を見せることの少ない母が、電話の向こうで「大丈夫」と繰り返す声を、彩葉は信じていいのかわからなかった。自分の夢を優先していいのか、家族を支えるべきか。そのはざままで、彩葉の心は揺れていた。

静かな図書館に、窓の外から鳥のさえずりが聞こえてくる。

その音さえも、今日は遠く感じられた。

第2章 新聞記者という夢の道

新聞記者になりたい——その思いが、最初に芽生えたのは高校一年の春だった。地元・仙台の県立高校に入学し、弁論部の見学に行った日。先輩たちが熱を込めて語る姿に惹かれて入部した。

「社会を動かすのは、言葉だ」

そんな先輩の一言が、彩葉の中に残っている。部活動では新聞記事を引用して時事問題を分析し、自分の意見を組み立て、発表する訓練を重ねた。時には地方紙の記者に直接インタビューを申し込んだこともある。現場で働く人の声を聞くたびに、「この人たちのようになりたい」という思いが強くなった。

家では、父も母も彼女の意欲を応援してくれた。特に母は、文章を書くことが好きだった彩葉に、「言葉で人を動かす仕事は、あなたに向いてるかもね」と微笑んで言ってくれた。

大学選びのとき、彩葉は迷わなかった。首都圏のマスコミ志望者に強いとされる大学を目指し、合格したときの喜びは今でも鮮明に思い出せる。東京での一人暮らしは不安もあったが、目標があったからこそ踏み出せた。

大学生活では、メディア研究ゼミに所属し、新聞社のインターンにも積極的に参加した。報道の現場に触れる中で、情報を収集し、裏付けを取り、限られた字数で読者に伝える難しさと、やりがいを実感した。特に、被災地の高校生を取材する企画では、相手の言葉を丁寧に聴き取ることの重要性を身をもって知った。

「誰かの声を、誰かに届ける」

それが記者の仕事であり、自分がやりたいことだと確信した。

最終面接のとき、採用担当者に「なぜ記者になりたいのか」と問われたとき、彩葉は少しも迷わず答えた。「社会の片隅にある声を、まっすぐ届けるために記者になりたい」と。

その言葉が通じたのか、見事に内定を勝ち取った。

夢への扉は、今、確かに開かれている。

だがその先に、家族と離れる現実がある。

母が病床に伏し、父が不安な声で電話をかけてくる今、この道をまっすぐ進んでいいのか——彩葉の胸には、夢と現実の間に揺れるざわめきが、静かに波紋のように広がっていた。

第3章 母の病、父の願い

その日、彩葉は大学の講義を早めに切り上げ、アパートの小さなテーブルに向かって座っ

ていた。

目の前にはメモ帳。そこに、聞きたいこと、伝えたいことを箇条書きにしていた。母の病気の名前、手術の日程、術後の経過、必要な支援……だが、どの項目にも、まだ答えは書き込まれていない。

「お父さん……もう少し詳しく話してくれないかな」

昨夜の通話では、父は動揺していた。「大きな病気だ」と繰り返すだけで、詳細を尋ねても「後で主治医に聞いてくる」と言うばかり。母と直接話した電話も、明るく「心配しないで」と言われたが、それが逆に胸を締めつけた。

“何も知らないまま進んでいいのだろうか”。

彩葉の心に、焦りと不安が渦を巻く。就職する会社は全国転勤があり、配属先は入社まで分からない。東京のままか、名古屋か、福岡か、あるいは地元の仙台かもしれない。だが希望は通らない可能性も高い。

「彩葉、できればこっちに戻ってこれないか……」

父の言葉は、命令ではなかった。ただ、孤独と不安が滲んでいた。母の世話、家事、病院への送迎——一人で抱えるには荷が重いのだろう。親戚はいても、頼れる存在ではないのかもしれない。

彩葉は、自分が一人っ子であることを思い出した。

もし兄弟がいれば、選択肢も違ったかもしれない。でも、いま実家に帰れるのか。内定を辞退して、地元で別の仕事を探す？ 配属希望に「仙台」と書いて交渉する？

いくつもの道筋が、頭の中で交錯する。

彩葉は深く息を吐いた。何かを決断するには、情報が足りない。まずは実家に帰り、母と顔を合わせて話そう。父の様子も、直接見てみよう。

まだ、答えを出すのは早い。

そう、自分に言い聞かせながら、彩葉はメモ帳を閉じた。

第4章 揺らぐ決意、確かな願い

「勤務地って、選べるんでしょうか……？」

学生課のキャリアセンターで、彩葉は静かに口を開いた。目の前には、落ち着いた雰囲気
のキャリアコンサルタントが座っていた。名札には「西園智久」とあった。

「事情をうかがっても大丈夫ですか？」

西園の問いかけに、彩葉はゆっくりと頷いた。

自分が新聞社に内定していること、母の病気が発覚したこと、父から「近くにいてほしい」
と言われたこと。彩葉は言葉を選びながら話した。自分の夢が、家族の事情によって揺らい
でいることも。

西園は時折、相槌を打ちながらじっと耳を傾けていた。

「新聞社の方には、まだ相談されていないんですね？」

「はい……まだ。内定通知を受け取ったばかりで、具体的な話は何も。勤務地も配属も分
かりません」

「なるほど。であれば、まずは“希望勤務地について質問すること”自体は、問題ありませ
んよ」

西園のその言葉に、彩葉の肩が少しだけ緩んだ。

「え、聞いてもいいんですか？」

「もちろんです。企業によっては、希望を伝えることで柔軟に配属を検討してくれるところ
もありますし、伝えなければ配慮されないまま進んでしまうこともあります。重要なのは、
“どう聞くか”です」

西園は、企業とのコミュニケーションの取り方について具体的なアドバイスをくれた。

「一方で、内定を辞退する可能性も視野に入れておられますか？」

静かな声だったが、彩葉にはその問いが鋭く響いた。

「……本当は、辞退したくないです」

彩葉は正直に答えた。

「ずっと、記者になりたいくて努力してきました。家族のことも大事です。でも、せっかく掴んだチャンスを手放すのは、怖いです」

西園は頷いた。

「“辞退するか残るか”という二者択一ではなく、“どうすれば両立できるか”という視点を持ち続けることも大切です」

彩葉は、その言葉を胸の中で何度も繰り返した。

両立。たとえば、勤務地の希望を出す。配属先の地域に柔軟性があるか確認する。必要であれば、一時的に家庭に戻る猶予を相談する。母の病状によっては、将来的な異動を視野に入れて動くこともできるかもしれない。

「情報を集めながら、できることを探していく。その中で答えが見えてくると思います」

西園の言葉は、静かに、しかし確かな灯のように胸に残った。

彩葉は深く一礼し、席を立った。

すぐに解決する問題ではない。

けれど、何もできないわけじゃない。

——夢をあきらめないまま、家族を大事にする方法を、私は探したい。

その思いが、揺れていた心に、少しずつ芯を通していくようだった。

第5章 母の笑顔と、自分の言葉

実家の最寄り駅に降り立ったとき、彩葉はまだ迷っていた。帰ることを決めたものの、本当に母に何を伝えるべきなのか、どんな表情で向き合えばいいのか、考えがまとまらないままだった。

家の扉を開けると、思ったよりも元気そうな母の笑顔が出迎えた。

「おかえり、久しぶりね」

その一言に、胸の奥がふっとゆるむのを感じた。けれど、それでも口にすべきことは、胸の中に重く残っていた。

夕食の後、二人きりになったタイミングで、彩葉は切り出した。

「お母さん、ちょっと話があるの」

母は湯呑を持ったまま、穏やかにうなずいた。

「うん、いいわよ」

彩葉は、一呼吸置いてから話し始めた。

「新聞社の仕事、どうしても挑戦したいの。夢だったから。だけど……お母さんが入院するって聞いて、正直すごく迷った。お父さんの『帰ってきてほしい』って言葉も、何度も思い出した」

母は驚いたように目を見開いた。

「ええ、そんなこと……お父さん、そんなふうに言ったのね」

「うん。でも、私、自分の気持ちにも正直でいたい。全部を両立するのは無理かもしれないけど、勤務地の相談とか、できることはやってみようって思ってる」

母はしばらく何も言わず、湯呑を両手で包んだまま視線を落とした。やがて、ふっと微笑んだ。

「そうね……あんた、強くなったのね」

「強くは、ないよ。まだすごく怖い。でも……ちゃんと伝えたかった」

母はそっと頷き、彩葉の手に手を重ねた。

「あなたの人生だからね。応援してるわ」

その言葉を聞いた瞬間、彩葉の中で何かが静かにほどけていくのを感じた。

口に出してみても、初めてわかることがある。沈黙が伝えるものもあるけれど、言葉にしなれば届かない想いも確かにあるのだ。

第6章 いつもの道を、少し違う気持ちで

アパートの玄関を開けた瞬間、少し冷えた空気が頬をなでた。数日ぶりに戻った部屋は、変わらぬ静けさに包まれている。

彩葉は鞆を置き、そっと「ただいま」とつぶやいた。口にしたその一言が、自分自身に向けられたもののように感じられた。

ふとノートパソコンを見ると、先日まで何度も訪れていた新聞社の採用ページが開かれたままになっていた。もう必要ないのに、なぜかすぐには閉じる気になれなかった。

新聞記者になるという夢。それは昔から変わらず、心の中で光っていた。でも、家族のことを知ってから、その光が遠のいたように思っていた。あのとき、西園さんに話を聞いてもらったことで、その光が再び近づいてきた気がする。

——夢は、現実のすぐ隣にあるかもしれませんよ。

西園さんの言葉が、心の中でやさしく響く。

彩葉はクローゼットを開けて、面談のときに着ていたスーツを取り出した。ポケットには、あの日のメモがそのまま入っている。震える手で書いた言葉。自分の気持ちを確かめた証だった。

「夢を諦めない。自分の道を、自分で選ぶ」

そう書かれていた。

内定先への入社も、新聞社への挑戦も、どちらも自分の選択だ。たとえ一度に全部を叶えられなくても、遠回りのように見えても、自分が決めた道なら歩いていける。いまはそのスタート地点に立ったばかりだ。

ふと、母の顔が浮かんだ。あのとき、勇気を出して自分の気持ちを伝えたからこそ、あの笑顔を引き出せたのだと思う。伝えることで、道は拓ける。その実感が、今の彩葉を支えていた。

彼女はノートを開き、新しいページにペンを走らせた。書きたいテーマが頭に浮かんでいた。それは、自分自身の経験だった。就職と家族と、迷いながらも進もうとする気持ち。これが、誰かに届く文章になるかもしれない。そう思えた。

小さな光を胸に抱きながら、彩葉は静かに決意する。

夢に向かう一歩を、今ここから始めよう。焦らずに、でも確かに。選んだ現実の中で、夢を育てていくのだ。

アパートの窓の外には、春の光が柔らかく差し込んでいた。いつもの街が、少しだけ輝いて見えた。

— 終わり —

Stories on the way.

巻末付録

【キャリア理論との関連解説】

本作『遠くの夢、近くの現実』では、以下のキャリア理論が彩葉の葛藤や成長に色濃く反映されています。

1. シュロスバーグのトランジション理論

人生の「転機(Transition)」に際し、人は「状況(Situation)」「自己(Self)」「支援(Support)」「戦略(Strategies)」の 4S を基に乗り越える力を育てていきます。彩葉は母の病という家族の急変を前に、「夢か家族か」の二項対立で悩みますが、西園との面談を通じて、支援(Support)や戦略(Strategies)を見出し、柔軟に向き合う姿勢へと転じていきます。

2. スーパーのキャリア発達理論

キャリアは人生全体にわたる発達過程であり、「成長」「探索」「確立」「維持」「解放」の各段階があります。彩葉は「探索期(Exploration)」において、記者としての自分のアイデンティティを形づくりつつあり、家庭との両立という課題に直面しながら、意思決定の力を深めています。

3. ジェラットの意思決定理論

意思決定は合理性だけでなく「価値観」や「直感」も含めてなされるべきであり、不確実な状況においても「予測」「価値」「行動」を見極めて進むという考えです。彩葉が「今すぐ辞退・決断する」のではなく、情報を集め、行動しながら可能性を探る姿勢は、まさにこの理論の応用といえます。

4. ホランドの RIASEC モデル

職業適性を 6 つのタイプ (Realistic、Investigative、Artistic、Social、Enterprising、Conventional) で分類する理論。彩葉は Social (人と関わる) + Investigative (調査・分析) + Artistic (創造) 傾向が強く、新聞記者という職種はまさにこれらの特性と親和性が高いと言えます。

5. プランド・ハップンスタンス理論(計画された偶発性)

計画しきれない偶然の出来事をキャリアに活かす柔軟な姿勢を重視する理論。母の病という予期せぬ出来事をきっかけに、彩葉は「選び直し」ではなく「選び直し続ける」柔軟性を身につけていきます。

【キャリアコン視点での振り返り】

1. 関係構築(ラポール形成)

西園キャリアコンは、初期から相談者の緊張に配慮した穏やかな語り口で、信頼関係の土台を築きました。共感的理解に徹し、相談者が安心して気持ちを語れる雰囲気を作ることができていました。

2. 問題把握と主訴の整理

相談者の語りから、母親の手術をきっかけに「家族とキャリアの両立」が主訴であると把握。単に「辞退すべきか」の二択に収束しそうな相談者の思考を広げるよう、背景と感情の整理を丁寧に促しました。

3. 自己理解・意思の明確化

キャリアコンは相談者が夢である新聞記者への強い想いを語る場面で、それを肯定的に受け止めました。一方で「家族のために帰る」気持ちとの間で揺れる葛藤も見逃さず、相談者自身がその両方を認められるよう支援しました。

4. 情報提供と方策提示

会社に勤務地配慮を相談する可能性について、選択肢の一つとして提案。「自分から伝えてはいけないのでは」という思い込みに揺れる相談者に対して、「聞いてみることは悪くない」というメッセージで安心感を与えました。

5. 意思決定の支援と行動促進

キャリアコンは「すぐに結論を出す必要はない」ことを伝え、行動に移る前の熟慮の大切さを強調。相談者が「両立の可能性を探る」という方針を自ら導き出すプロセスを促進しました。

6. 家族との関係の再構築支援

「伝える勇気」の重要性を相談者自身が意識するよう促し、親子間のコミュニケーションの質を見直す機会を作りました。このアプローチは、キャリア支援において重要な“支援ネットワークの再強化”とも言えます。

【逐語録】

CL＝宮坂 彩葉(22歳・女性・大学生)

CC＝西園 智久(62歳・キャリアコンサルタント)

CC(西園)：今日はどのようなご相談内容でしょうか。

CL(宮坂)：はい……今、大学4年生で、東京で一人暮らしをしているんですけど、先日、希望していた会社に内定をいただいたんです。

CC：おお、それは素晴らしいですね。

CL：でも……母が体調を崩してしまって。父から急に電話があって、手術が必要な病気だって言われて。できれば、家の近くにいてほしいって……。

CC：それは心配ですね。お母様のことも急なことで、大変でしたね。

CL：はい……。まだ詳しい状況も分からなくて。母とも電話では話したんですが、「大丈夫」って言うばかりで。本当は心配でたまらなくて……。

CC：ご実家は仙台とお聞きしましたが、今の場所からだと距離的にはどれくらいですか？

CL：新幹線で一時間半くらいです。遠すぎるってほどではないけど、急に「すぐ帰ってきて」って言われても、すぐには……。

CC：なるほど、簡単に行き来できる距離ではないですね。今、内定されている会社は東京の会社ですか？

CL：新聞社で、全国に支社があるところなんです。勤務地はまだ分からなくて、東京かもしれないし、地方の支局かもしれません。全国転勤があるので……。

CC：そうすると、働き方についても不確定な点が多いということですね。

CL：そうなんです。でも、ずっと記者になりたいくて大学を選んで、準備してきたから……。諦めるのはつらくて。

CC：それは簡単には割り切れませんね。彩葉さんとしては、両立の道があるなら、探して

みたいというお気持ちでしょうか？

CL：できれば……勤務地を限定してもらえそうな働き方ができればって。でも、そんなこと、聞いていいのかなって不安もあって。

CC：聞いてみるのは悪いことではありませんよ。どういうふうに聞くかも大事ですが、ご自身の状況をきちんと伝えることは大切です。

CL：はい……。

CC：辞退か継続かの二択ではなく、“どうすれば両立できるか”という視点を持ち続けることが、今は大事なように思います。焦らず、一緒に整理していきましょう。

CL：ありがとうございます……そう言ってもらえて、少し楽になりました。

※上記は 2025 年6月21日に行われたロールプレイ逐語録の要約に基づき、再構成したものです。学習者が支援の流れやセリフ構成を理解しやすいよう配慮しています。

あとがき

この物語は、夢と現実の狭間で揺れる一人の大学生・宮坂彩葉の姿を通じて、「キャリアを選ぶ」とはどういうことかを見つめ直す試みでした。

誰かの支えになりたいという気持ちと、自分の夢を追いかけたいという気持ち。どちらも本物で、どちらも尊いものです。けれど現実の中では、選ばなければならない場面が訪れます。そのときに、すぐに結論を出さず、立ち止まり、考え、誰かに相談する——それもまた、立派な“選択”のひとつです。

彩葉はキャリアカウンセリングという場を通じて、自分の想いに言葉を与え、他者との対話の中で気づきを得ていきました。このプロセスは、キャリア相談に携わるすべての人が心に留めておきたい本質だと感じています。

私たちは進路の選択を、いつも明確な情報と確信のもとで下すわけではありません。時には不安や迷い、そして予期せぬ出来事が、思い描いていた未来を揺るがします。この物語の中で描かれた葛藤は、決して特別なものではなく、今まさに誰かが抱えているかもしれない、等身大の現実です。

キャリア相談の力とは、そうした“揺らぎの中にいる自分”に安心して声をかける手段を得ることでもあります。どんなに悩んでも、言葉にすることで見えてくることがあります。そのきっかけを、物語として届けられていたら幸いです。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

2025 年 8 月 著者

小説『遠くの夢、近くの現実』(進路と家族をめぐる選択)

© 2025 caritabito.com

All rights reserved. 無断転載・複製・引用を禁じます。

小説『遠くの夢、近くの現実』(進路と家族をめぐる選択)は、著者の創作に基づくフィクションであり、登場する人物・団体・状況等はすべて架空のものです。